

## 生きられた空間としての秘密基地

Children's dens as a lived space

川越 ゆり

Yuri KAWAGOE

### レジュメ

秘密基地とはどのような空間なのか。デヴィッド・ソベルは、子どもや大人を対象にした秘密基地調査の結果、秘密基地作りが多くの文化圏に見られる現象ではないかと述べている。そうであれば、子どもの成長という視点のみならず、人間と空間との関わりを考える際にも、秘密基地は興味深い対象になるだろう。本稿では、学生による秘密基地(秘密の場所)についての回想文を題材に、個々の体験談を通して、生きられた空間としての秘密基地の読み解きを試みた。

まず、回想文の傾向の説明から入り、秘密基地で遊んだ時期については、小学校 3 年生が最多であったこと、また、複数の男女で共有された秘密基地の回想がもっとも多かったことを述べた。場所については、山・林・田畑・野原・空き地・竹やぶ・特定の木など、戸外に作った秘密基地が目立ち、人目につきづらく、遮断性の高い、狭い場所が選ばれていることを説明した。

次に、秘密基地がどのような生きられた空間であったかについての読み解きを行った。主に回想文の語りを引用しながら、そこがなわばり意識の強い「秘密」の場であり、大人を閉めだして成立する子どもの世界であること、冒険の場であり、「いつもの自分とは別の誰か」を生きる遊戯空間としての性格も備えていることを引き出した。また、しばしば見られる秘密基地空間の創造を、秘密の居場所を自分の中に定着させるための象徴的行為として解釈した。

さらに、文学作品にあらわれたイメージやボルノウの空間論を援用しつつ、秘密基地に安全な隠れ家としての側面や、外の世界を観察するための場としての側面もあることを引き出した。まとめとして、現実とは別の自分を生きるこ

とができる場、混沌とした日常から一時的に退くことのできる場としての秘密基地を、日常の外に在る一種の非日常的な居場所と結論づけた。

## はじめに

秘密基地とはどのような空間なのか。環境教育研究者、デヴィッド・ソベル (David Sobel) は、子どもや大人を対象にした秘密基地調査の結果、秘密基地作りが多くの文化圏の子どもに共通して見られる傾向ではないかと述べている。<sup>1</sup> また、『子どもとあそび』の中で、仙田満は、遊びの原空間のひとつとして「アジトのスペース」を挙げている。<sup>2</sup> 子どもが秘密の場を作り、そこで生きるという現象が多くの国や時代に見られるのなら、秘密基地は、子どもの成長という点のみならず、人間と空間との関わりを考える際にも興味深い対象になるだろう。

本稿では、学生による回想文を題材に、生きられた空間としての秘密基地（秘密の場）の読み解きを試みる。生きられた空間としての秘密基地を考える際にもっとも重要なのは「個々の主体によって体験されている具体的な空間がある」<sup>3</sup>という概念である。回想文という個々の体験談を通して、秘密基地がどのような空間として記憶されているのかについて明らかにしたい。

## 回想文の概要

本稿で引用する回想文は、「子ども時代に遊んだ秘密基地、あるいは秘密の場所と聞いて思い浮かぶ場をひとつ選び、その場所について書いてください」という指示のもと、著者の担当する授業内で書かれた。平成 22 年度に入学した 1 年生 50 名（男子 19 名、女子 31 名）が中心であるが、それ以前のものも適宜使用している。

回想された秘密基地で遊んだ時期については、小学校 3 年生がもっとも多く、2 年生と 4 年生が同数でそれに続いた。複数で共有した秘密基地は 41、ひとは 6、分類不能は 3 で、複数メンバーで共有した秘密基地の回想が大半を占めた。このうち、きょうだいやいとこ、クラスメートなど、メンバーが男女混合のものは 18、同性同士は 5、不明は 18 である。

秘密基地を作った場については、山・林・田畑・草むら・空き地・竹やぶ・

特定の木 (16) といった環境が多数を占め、押し入れ (12)、空き家・小屋・物置 (7) がそれに続く。家具やシートで作った家、ダンボールハウス、橋の下やテトラポッドなども挙げられており、全体的には戸外に作られた秘密基地の回想が目立った。

屋内外に関わらず、多くに共通しているのは、人目につきづらく、遮断性の高い場が選ばれていることである。自分の背丈程もある高さの草を踏み固めて作った空間 (周囲は草の壁に囲まれている) や、木の洞や枝が重なっている中の空洞、工事終了後に放置されたプレハブ小屋、建物と建物 (あるいは塀) の間の隙間スペースなどが典型だろう。過去の回想文の中には、防空壕を挙げたものもあった。また、「基地」という言葉から連想される広いスペースとは対照的に、狭い場所が好まれている。人目に触れにくい、遮断性が高い、狭い、といった要素は、以下に述べる秘密基地の場の特性や、そこでの体験とも密接に関わっている。

## 子どもだけの秘密の世界

秘密基地の大きな特徴は、自分ひとりの場であれ複数で共有しているのであれ、文字通りそこが「秘密の」場だということである。「3人の秘密の場所」「自分達だけの空間」「他人に邪魔されない自分たちだけの城」といった言葉に端的に表れているように、そこはメンバー以外には閉鎖性が高く、なわばり意識が強く反映された場である。スウェーデンの子どもを対象に秘密基地調査を行ったマリア・キュリン (Maria Kylin) は、秘密基地が廃棄される大きな理由に、他の子どもに見つかるなどして「もう秘密ではなくなった」ことを挙げている。<sup>4</sup>

秘密基地が人目に触れづらい場に作られていることは、「秘密の」という場の特性と関わっている。その一方で、家の中や庭など、比較的、人目に触れやすい場に作られた秘密基地に対しても、子ども自身は秘密の意識をもっている。傘をテント状に重ねた秘密基地を駐車場にしたという学生は、親がてっぺんの傘を抜いて顔を見せると「拒否反応を示してい」たと述べているが、それは、自分の領域に無断で侵入されたことへの不快感にほかならない。

回想文の中には、誰にも言わないというルールをつくる (約束をする)、合言葉をつくる、見張りをおくなど、なわばり意識の強さを示す具体的な行動

が描かれているものもあった。以下はその典型で、小学校中学年の頃に、男女5人で作った秘密基地についての回想（女子）である。

（例1）私は、小学校3～4年生のころ秘密基地を作って遊ぶのが大好きでした。飽きたら他のを探して遊んでいましたが、その中で私が最も気に入っていたのは、家の近くの山に作った秘密基地でした。そこは、木が何本も重なり合って木の塊のような場所でした。外から見ると中は、木の隙間から少し見えるくらいでしたが、中は空洞になっていて部屋のようになっていました。（略）この秘密基地にはルールがあって、ルール1は絶対に誰にも話さない、ルール2は秘密基地の中では喧嘩はしないなど、ダンボールに書いて吊るしてありました。

仙田は、「アジトのスペース」を、「親や先生、大人に隠れてつくる子どもたちの秘密基地」と述べ、秘密の対象を大人に限定している。<sup>5</sup> 秘密基地はメンバー以外の者すべてに対して閉鎖的であるが、とりわけ大人に対しては固く閉ざされている。たいていの場合、秘密基地の存在は親には内緒にされる。大人が入ることのできないような狭い場所につくられることもある。あるいは、秘密基地を振り返ったときに出てくる、「子どもの社会がある場所で、学校よりもその子どもだけという所が強い場所」「子どもの世界を作る場所」などの言葉からも、そこが大人を閉めだしてつくられる子どもだけの世界であることがうかがえる。秘密基地は、大人が主導権を握る家庭や学校の対極に置かれた場である。

## 冒険の場としての秘密基地

では、子どもは秘密基地でどのような体験をしているのだろうか。本稿では、「冒険・探検」と「空間の創造」の二つのキーワードから考えたい。

秘密基地は、しばしば冒険心を刺激する場として記憶されている。学校や親に立ち入りを禁じられた場を選んだり、そこで大人に叱られるような危険な遊びをしたりすることも秘密基地の冒険性を高めるが、とりわけ注目すべきは冒険・探検ごっこ遊びだろう。以下、小学校2年生頃に、男女4名で学校の山に作った秘密基地の回想（女子）から引用する。

(例2) 秘密基地での約束は、他の人に基地のことを言うてはいけないことと合い言葉を言うことであった。基地は地面に捨ててきたダンボールを敷き、見張り係と生活係に分かれて行動していた。見張り係りは木の上に登り敵がいないか不審な物はないかどうかを観察し、異常がなければ食料を探しに行く。生活係は基地の周りにある木から木の実を採ったり、つつじの花を採って食料調達をしながら、基地をより過しやすいものにしていくというものだった。(略) その日その日ごとに変わる合い言葉は毎日の楽しみであり、自分たちは仲間なんだという嬉しさがあった。今でも思い出に残っている合い言葉は「作って」「わくわく」である。

例3は、小学校3年生の頃に、男女5人で共有した小島の中の竹やぶの秘密基地についての回想(男子)である。島は観光用だったがふだんは人気がなく、無人島に近かったという。また、小学校3年生の足でも一周できる程度の大きさだった。

(例3) 学校が午前中で終われば、みんなで家からこっそり色々な物を持ち出して福浦島の秘密基地へと向かった。基地はなぜかハート型のような形で真ん中に竹の切り株があった。私はいつも大将だったので、その切り株は私のものになった。福浦島を探検する前に必ず秘密基地へ向かい、それぞれの武器を持ち、探検へと向かった。(略) ひと通り探検が終われば私が剣を切り株に刺すとみんながそれぞれ剣の周りに武器を置いた。ここでその日の探検が終わる、という流れだった。

学生は島内の竹やぶを秘密基地として挙げているが、島全体が探検の領域であり、竹やぶは冒険の拠点になっている。島内の探検では、戦利品を探し、グミの実や岩牡蠣をとるなどして基地に持ち帰った様子が回想されている。冒険は、切り株に剣を刺すという儀式的行為で閉じられるが、それはまた、秘密基地での時間の終了の合図でもある。

ごっこ遊びに興じるとは、非日常に生きることに等しい。ままごとの母親役であれ、郵便ごっこの配達人役であれ、ごっこ遊びをしている間は、現実の自分とは違う誰かを生きているからである。遊戯に参加している間、人は「別

の存在になっている〉のだし、〈別のやり方でやって〉」おり、日常は「一時的に消え」てしまう。<sup>6</sup> 冒険・探検ごっこをしている子どもは、勇敢な冒険者として生きている。きょうだいやクラスメートも冒険仲間であるそこでは、現実とは別の人間関係が営まれている。役割分担をし、食料調達をし、見張りを置き、武器をもって見回るなど、彼らはあたかも無人島で自分達の力だけを頼りに生きているかのようにふるまっている。家庭や学校で、子どもが大人の保護下に置かれている現実とは対照的である。より自立的に、より主体的に世界と関わって生きる冒険者を演じることで、主人公の感覚とでもいうべきものが得られるのは、この種のごっこ遊びの大きな魅力だろう。秘密基地という大人を閉めだした空間で、子どもが一人前の大人のようにふるまっているという矛盾は非常に興味深い。秘密基地には、大人への反抗と同時に、大人になることへの憧れが複雑に反映されている。

冒険・探検の類いに限らず、ごっこ遊びは秘密基地体験としてしばしば語られる。もちろん、ごっこ遊びは秘密基地内でなくてもできるだろう。極端に言えば、世間話をする母親達の目の前でもできる。しかし、他人の目を気にせずに済む、仲間同士の、あるいは自分ひとりの閉じられた空間の方が、より容易にごっこ遊びの世界に没頭できるだろうことは想像に難くない。秘密基地は〈保護者としての大人・大人の保護下にある子ども〉という現実の関係を一時的に離れ、いつもとは違う自分を生きられる遊戯空間としての側面をもっている。

冒険の場としての秘密基地はつねに戸外にあるとは限らない。以下は、年長から低学年にかけて遊んだ、自分ひとりの秘密基地の回想である（女子）。秘密基地は、並んで敷かれた布団の中だった。

(例4) おもに中では動き回っていました。動き回りすぎて、そのまま中で寝てしまうことも多々ありました。また、懐中電灯とみかんを持って中に入り、照らしながら、探検をして、いい感じのところを見つけると、そこでみかんを食べたりしました。(略) また、中でぐるぐる回って、方向感覚を失うことで、どこの出口に出るかわからないというドキドキ感を味わう遊びもしていました。秘密基地で覚えていることは、とにかく暗かったということと、自分しかいなかったということです。今、そんな秘密基地について振り返ってみると、そこは私にとって、冒険ができる場所であったのだと思います。

上記は、室内の狭いスペースですら、冒険体験を可能にすることを示す好例である。地底探検さながらに布団の中を進みながら、暗闇の中で自己の存在を実感したことが、冒険感覚と強く結びついている。

## 空間をつくること＝空間を生きること

回想文の多くには、秘密基地に適した場が見つかり、家から不要になった家具を持ち出すなどして、居心地良いスペースにする工夫を施した様子が語られている。ブルーシートやダンボール、傘、ロープ、椅子、壊れたラジオやテレビ、懐中電灯などの手近な材料が定番である。宝物やおかし箱を置いたり、ロープと板でブランコやリフトを作ったりしたというものもあった。

キュリンは、秘密基地作りに熱中する子どもが、基地を作っては壊しをくり返す、あるいは、完成すると燃やして廃棄し、新たな場を作るケースを紹介している。<sup>7</sup> 同じような体験は、以下の回想文でも語られている。小学校低学年頃に、兄とダンボール箱で作った秘密基地についての回想（女子）である。

（例5）ナイフやガムテープを工夫して使い、窓やドア、屋根などを付けることで、本物の家のような構造にしていました。また、包装紙をカーテンに見立てて作ったり、家の中にテーブルを作ったりと、さまざまな工夫を凝らしました。限られた材料でいかに工夫して新しいものを作るか、と考えながら作る過程がとても楽しかったことを覚えています。（略）しかし、兄は何故だかせっかく頑張って作ったダンボールの家を「地震だー」などと言って全部壊してしまっていました。私は初めはそのことにとっても怒っていたのですが、途中から諦めて「私も。」と言って壊すようになっていました。

そこで遊んだことよりも、秘密基地を作ったことをもっとも印象的な体験として挙げているものもある。以下、小学校3、4年生頃、双子の姉と神社の裏にある松の木の洞に作った秘密基地の回想文（女子）から引用する。

（例6）……近くの民家から捨てられたようなすのこやベニヤ板を引っぱり出し、うろまで持っていき、その下に敷いて直接地面の上に座ら

ないようにしたりだとか、丁度良い具合に生えている松の枝に持参していた傘を引っかけ雨や日射しを避けるものを作ったりと、まるで新しい家を作るといわんばかりの熱の入れようだった。そこでは遊ぶ、というより基地をより素晴らしいものにする、という方に目がいていた記憶の方が多い。

秘密基地という場の創造に対する子どもの熱中ぶりは、何を意味するのだろうか。秘密基地の創造は、非常に象徴的な行為に思われる。ある空間を作ることは、その空間を生きることに等しい。親に与えてもらった自室とは異なる、自分で見つけた最初の秘密の居場所を作る行為は、自分とその場との距離感を埋め、場の所有者になるための大切な手続きである。空間を広げ、あちらこちらから調達したものを配置するなどして空間を整えるプロセスには、秘密基地という居場所を自己の内面に定着させる効果があるのではないだろうか。

### 「安全な隠れ家」としての秘密基地

冒険や空間の創造などの活動が行われる一方で、秘密基地は、そこに身を置くとくつろぐ、安らぎの空間でもある。秘密基地に、親に叱られたときや学校でいやな出来事があったときに行く避難所的な側面があるのも、そこが気持ちの落ち着く空間だからだろう。以下は、年中から小学校2年生頃までに遊んだ、祖母の家の押し入れの秘密基地の回想（女子）である。弟と一緒に遊ぶこともあったが、基本的には自分ひとりの秘密の場だったという。

（例7）秘密基地の中は暗くて、使いこまれた布団のにおいやおいしいの木材のにおいやふすまの古い紙などが混ざり合ったにおいがした。しかしそのにおいは決して嫌なものではなく、むしろ心地よく安心するにおいで、私は大好きだった。そしてしっとりとしてひんやりとした空気は私を落ちつかせてくれた。私は布団の上のわずかなスペースにいたので、その狭さや外の音があまり聞こえてこないことなどが密閉感を増進させ、「自分だけの場所」という安心感につながったのかもしれない。



押し入れは、昼間でも闇を体験できる室内空間である。戸を一枚隔てた向こうには明るい世界が開け、普段の生活が営まれているが、ひとたび戸を閉めれば暗闇に包まれ、家族の気配や生活音は遠ざかる。そこは、日常から一步引いたどこかに身を置いているような感覚をあたえる場である。押し入れ特有の暗さや狭さ、積まれた布団の感触などが、閉じられた内部にいることの安心感をさらに増す。

秘密基地に身を隠すことの安心は、戸外の秘密基地体験にも語られている。以下は、小学校3、4年生頃にクラスメートと学校の敷地内の山に作った秘密基地についての回想（男子）である。最初は木の上の秘密基地だけだったが、その周りに中が空洞になっている灌木のトンネルを見つける。

（例8）……そこからも秘密基地に入れるようにするために、トンネルに入って邪魔になるような木の枝を切ったりして人が通れるようにした。この中にも少し広い空間があったため、ダンボールを運んで隠られるようにした。（略）空を見上げたり、気分を換えたい時には木の上の秘密基地を使って、鬼ごっこやかくれんぼをする時にはトンネルの秘密基地を使って遊んでいた。私にとって秘密基地とは、自分達だけの空間であり、自分が隠れたりできるような場所だったと思う。誰にも邪魔されたくない時やゆっくりしたい時などに秘密基地というものはとても良かったと思うし、秘密基地は私をとてもワクワクさせてくれた。

上記の引用には、遊戯空間であると同時に安らぎの場でもあるという秘密基地の多面的な性格がよく表われている。安心感の源が隠れられる空間と関係している点は、前述の押し入れと同じだろう。

秘密基地体験の中には、秘密基地から外を観察したことを述べているものもあった。以下は、小学校3、4年生頃に、クラスメートと笹林の中に作った秘密基地の回想（女子）である。

（例9）「ちょっと見張りに行ってくるー。」そう言って、たくさんの笹の林の中を音を立てずに進んで行った。大人が道を歩いている様子を葉っぱと葉っぱの間からのぞいては、くすくすと友達を笑う。（略）

秘密基地で遊ぶ上で、絶対に守らなければいけないことは、大人には気付かれないようにすることだ。私達は、秘密基地に身をひそめ、大人が通る様子を観察した。2人くらいずつ見張りの人を決め、交代で外の様子を見に行った。あのドキドキする感じは今でも忘れられない。

キュリンは、子どもが秘密基地に隠れて大人や他の子どもを眺めている例を報告し、特に周囲を一望できる木の秘密基地は“hidden observation points”<sup>8</sup>に適っていると述べているが、上記にはまさに「観察のための隠れ場」としての秘密基地が語られている。人物のみならず、押入れの戸の隙間から周囲を眺めた、秘密基地に寝転がり空や太陽を眺めたなどの体験も、外の世界を観察することに入るだろう。

自分の姿を見られることなく外の世界を眺めるとは、どのような経験なのだろう。“hidden observation points”のイメージは、子ども時代を描いた文学作品にも見ることができる。アメリカの絵本作家、デヴィッド・ウィーズナー (David Wiesner) の『大あらし』(*Hurricane*) は、大嵐で倒れた一本の木を二人だけの場にする兄弟の物語である。<sup>9</sup> 兄弟は倒木を宇宙船やジャングルや海賊船に見立てて、ごっこ遊びに興じる。その一方で、生い茂る葉の中に身を隠し、ただ外の景色を眺めて過ごす。倒木はある時は二人だけの遊戯空間になり、ある時は周囲の世界を眺めるための隠れ場になっている。

イギリスの詩人、ウォルター・デ・ラ・メア (Walter de la Mare) の「窓」 (“The Window”) という作品にも、隠れた場から外の世界を眺める子どもが描かれている。

Behind the blind I sit and watch  
The people passing—passing by;  
And not a single one can see  
My tiny watching eye.

They cannot see my little room,  
All yellowed with the shaded sun,  
They do not even know I'm here;  
Nor'll guess I am gone.<sup>10</sup>

この詩には、日よけの陰からそっと顔をのぞかせる子どもの絵が添えられている。子どもには通りを歩く人々が見えるが、通りを歩く人々に子どもの姿は見えない。子どもは、誰にも気づかれない部屋の内にいることの安心と、その部屋から外の世界を眺めることの幸福に包まれている。それは混沌とした世界のただなかで動き回っているときには得られない類いのものだろう。

『人間と空間』(*Mensch und Raum*)で、オットー・フリードリッヒ・ボルノウ (Otto Friedrich Bollnow) は、子どもには隠れた場から周囲の世界を観察したいという欲求があると述べた上で、大人もまた、「自己の引きこもっているところの空間から、同時に外部世界を目にとめておきたいという欲求を感じている」とし、その観点から家の窓を解釈している。<sup>11</sup> 秘密基地は、ボルノウのいう「自己の引きこもっているところの空間」としての側面ももっている。

## まとめ

以上、回想文に語られたさまざまな体験を通して、秘密基地空間の特性を明らかにすることを試みた。秘密基地は多面的な空間である。本稿で挙げた特性はほんの一面にすぎないが、ソベルやキュリンの調査結果との共通性も多く見られた。写真集『hi mi tsu ki chi』などを見ても、自然環境に恵まれず、ゲーム世代の申し子のような現代の都市部の子どもの中でも、秘密基地という場への欲求が深く根づいていることがわかる。<sup>12</sup> おそらく、秘密基地は、多くの国や時代に見られる現象ではないだろうか。

生きられた空間としての秘密基地のもっとも本質的な特性は、そこで生きる主体たる子どもにとっての居場所だということだろう。もっとも、秘密基地は、「家庭」のような居場所とは質を異にしている。本稿で見てきたように、ここでは現実での大人・子どもの関係を中断し、いつもの自分ではない誰かとして生きることができ、現実(学校や家庭)とは異なる人間関係を結ぶことができる。あるいは、混沌とした日常から一時的に退き、外の世界を観察することもできる。換言すれば、秘密基地は日常の外に在る特別な空間であり、一種の非日常的な居場所なのである。<sup>13</sup>

学校帰りに子どもが秘密基地に寄って遊び、夕食の時間がきて家路に着くという構図は、日常から離れてひととき非日常を生き、また日常に戻る往還の運動とも解釈できる。秘密基地では日常とは異なる空間と時間が生きられている。

しかし、そのような非日常的な居場所は、子どもにのみ必要とされるものではないだろう。秘密基地は子ども時代に見られる一過性の空間ではなく、むしろ、大人の生活においても深いところで関わっているように思われる。それについては、別稿に機会を譲りたい。

本稿は、ポップカルチャー学会第 39 回大会（2011 年 10 月 4 日、於昭和女子大学）にて口頭発表した論考に加筆修正を施したものである。

本稿で引用した学生の回想文は、明らかな誤字・脱字以外は修正していない。

## 注

1. David Sobel. *Children's Special Places*. Wayne State University Press, 1993, pp.12-13.
2. 仙田満『子どもとあそび—環境建築家の眼—』（岩波書店、1992 年）19 頁
3. 田中彰吾「生きられる空間—空間を考えるための方法論的観点」（『学校空間の研究』、岩間教育科学研究所、2011 年）7 頁
4. Maria Kylin. "Children's Dens." *Children, Youth and Environments*, vol.13 (1). *Children, Youth and Environments*, University of Colorado, 2003, p.24.
5. 仙田満『子どもとあそび—環境建築家の眼—』、19 頁
6. Johan Huizinga. *Homo Ludens*. (『ホモ・ルーデンス 人類文化と遊戯』高橋英夫訳 中央公論社、昭和 42 年、31 頁)
7. Maria Kylin. "Children's Dens." p.24.
8. Ibid. p.27.
9. David Wiesner. *Hurricane*. Houghton Mifflin, 1990. (『大あらし』江國香織訳、ブックローン出版、1995 年)
10. Walter de la Mare. "The Window." *Peacock Pie: A Book of Rhymes*. Faber, 1913, p.36. (『詩集 孔雀のパイ』まさき・るりこ訳、瑞雲堂、1997 年)
11. Otto Friedrich Bollnow. *Mensch und Raum*. W.Kohlmann, Stuttgart,

1963. (『人間と空間』大塚恵一他訳、せりか書房、1978年、151頁)
12. 西宮大策『hi mi tsu ki chi』(小学館、2009年) この写真集には、2006年から2008年の間に東京近郊で撮影した秘密基地が収録されている。
  13. 秘密基地が日常とは異質の空間として記憶されていることは、回想文に見られる「現実からはなれた世界」「自分が別の人格になりきって遊ぶ異次元空間」「違う空間にいるような気持ちになったのが楽しかった」などの言葉からもうかがえる。

